

歴史的風土の保護と創造的利活用 実践10年の報告

—奈良県明日香村を例として—

三木 健二*・新開 高尾**・山本 尚武**・久門 雅臣**

Conservation and Utilization of Historic Sites, especially on ASUKA Village in NARA, and Activities of ASUKA Scenery Conservation Volunteer Association

Kenji MIKI*・Takao SHINGAI**

Hisatake YAMAMOTO**・Masomi HISAKADO**

目次

1. はじめに
2. これまでの活動の軌跡
 - (1) 作業キャンプと日帰り活動——明日香村全村が対象
 - (2) 作業個所・日程の決定と3者の役割分担
3. 課題はどう解決したか
 - (1) 費用を払ってまで汗を流してもらえるか
 - (2) 作業の指導体制はどうする
 - (3) 作業後のメンテナンスは誰が担当
 - (4) 開催日程と熱中症対策
4. 活動評価の視点
5. 新たな課題
6. 考察

キーワード 歴史的風土の保全、景観保護、協働、ボランティア活動

*客員研究員、景観ボランティア明日香会長、元読売新聞論説委員、**景観ボランティア明日香副会長

要旨

奈良県明日香村の歴史的風土や景観は、休耕田、耕作放棄地、荒廃竹林などの増大によって損なわれる危機にさらされている。前報で、その背景と問題点を分析、解決策のひとつとしてボランティア、行政、地元住民参加による景観保全活動を提言した。この提言にもとづき「景観ボランティア明日香」が発足、2泊3日の作業キャンプ（ワーキングホリデー）や日帰り活動を中心にした活動で、10年間に6集落21か所の景観を保全・修復した。作業キャンプで景観保全した集落に、自発的、自主的に作業個所をメンテナンスする組織ができ、景観保全の仕組みが村内に根付きだした。これを支えているのは「ボランティア団体・行政側・地元集落」の3者による協働作業方式で、ボランティア団体が景観保全活動に取り組む際に活用できる多くのノウハウ、ヒントが得られた。その半面、新たに解決すべき問題点も浮かび上がった。

1. はじめに

古都の景観をどう保全していくか、大化の改新など古代史の舞台となった奈良県明日香村の場合を取り上げ、2000年に大阪経済法科大学科学技術研究所紀要第4号¹⁾で、歴史的風土の凍結的保存から、村の活性化をはかりつつ歴史的風土の保存・利活用する方向への転換をどう図ればよいか、主にボランティア活動の視点から考察し、提言した。

この中で、明日香村が直面している課題を整理し、その解決策として「トータルプランナー」の設置、「参加・滞在型」の歴史的風土保全活動、具体的には、英国ナショナル・トラストの作業キャンプ（ワーキングホリデー）の考えを取り入れた“日本版ワーキングホリデー”を提言し、学び体験し実感できる場、さらに都市と農村の住民の交流の場にもなるよう求めた。

結論として①歴史的風土を愛する人たちが繰り返し、気軽に訪ねて滞在し、楽しみながら歴史的風土の維持管理に協力する柔軟で創造的な“ソフトづくり”がいかに重要か、②地元住民、都市住民、自治体の三者が協調しながら、それぞれの持ち味を発揮できる事業を定着させる以外にない、ことを強調した。

（財）明日香村地域振興公社（愛称：あすか夢耕社）では、この報告と、明日香村の将来像をまとめた第46回歴史風土審議会の特別部会²⁾での筆者の一人三木の提言をもとに、まず公社が呼びかけて2002年に、景観保全作業にあたるボランティア（景観ボランティア）を募集し、2泊3日間の作業キャンプを開始した。

公社主催の作業キャンプは、ボランティア自身による自主的活動を育てるための、いわば“慣らし運転”の役目を果たした。1, 2回目の作業キャンプ参加者のうち、この報告の筆者ら有志が集まって2004年に「景観ボランティア明日香」を結成。以来、景観ボランティア明日香と明日香村地域振興公社が共催し、作業地となる集落（大字）住民が協力する「ボランティア・村側・集落」の3者による「協働景観保全作業」が定着した。

2. これまでの活動の軌跡

景観ボランティア明日香の活動分野は、年々、拡大し2011年11月現在、

- ① 2泊3日の作業キャンプ（ワーキングホリデー）を年1回実施
- ② 作業キャンプで景観修復した個所のメンテナンスにあたる日帰り活動を年2回以上実施
- ③ 里山再生活動（1泊2日）を年約30回実施
- ④ 活動資金を確保するための荒廃竹林伐採請負活動
- ⑤ 上居（じょうご）大字（集落）に協力、景観阻害となっている放置廃屋の解体撤去作業
- ⑥ 上居大字との協働作業（草刈り、傾斜地桜園整備など）
- ⑦ 研究調査（暮らしと生活聞き取り調査³⁾や、伐採竹利用の製品開発など）

と、多岐にわたっているが、ここでは活動の出発点となり、公社との共催事業である①と②に絞って考察したい。

（1）作業キャンプと日帰り活動——明日香村全村が対象

作業キャンプの第1の目的は、英国ナショナル・トラストの作業キャンプ（ワーキング・ホリデー）のように、歴史的文化的遺産のある風光明媚な場所で、ちょっぴり汗をかきながら、古代ロマンに思いをはせつつ、泊まり込みで作業し、景観保全・修復に貢献したという達成感に浸ること。2番目は、地元の人たちと一緒に作業し、都市住民と明日香村の人たちの交流を深めること。3番目は、宿舎で飛鳥の歴史を学び、世代間を越えて交流・歓談し、“あすか大好き人間”を一人でも増やすことである。

さらに大きな狙いは、こうした活動を通じ、明日香村の各集落に景観を保全する仕組みが生まれ、それが全村に広まることである。

明日香村の中でも、国営公園に指定されている4地区は整備が行き届いているものの、そこから外れると、景観上、問題を抱えた集落が多く、私たちの活動は明日香村の全39集落（大字）を対象にしている。

作業個所は固定せず、集落から支援要請のあった場所や、私たちが村内を見回って景観修復が必要と考えた個所、さらに明日香村地域振興公社の意向を踏まえて総合的に判断し、緊急度の高いところから、毎年1か所ずつを選んで、2泊3日間、宿舎（明日香村祝戸、祝戸荘）に起居して作業キャンプを実施している。参加者の交通費は自己負担で、参加費（2泊6食と会費500円を含む）は15,000円。

3者で実施するには、それぞれの都合を調整しなければならず、候補地は約2年前に決定し、打ち合わせをできる限り頻回に行うようにしている。

作業キャンプには、東京、神奈川、埼玉など関東圏、大阪、京都、兵庫、和歌山、奈良など近畿圏のほか、北海道、中部、中国、九州から、さらに海外からは台湾、韓国環境団体代表

ら、合わせてボランティア約50人が参加し、地元集落の住民20～30人、地域振興公社スタッフらを含め総勢80～100人で作業している。

日帰り活動は、作業キャンプで整備した個所のメンテナンスが目的で、2005年から年2回実施、毎回、40～100人以上が参加している。

景観ボランティア明日香の現在の会員数は190人。

作業キャンプと日帰り活動（表1）で、石舞台の背後にある上居（じょうご）集落の1haに及ぶ急傾斜地荒廃竹林を伐採し桜園へ整備した（写真1、2、3）ほか、川原地区を流れる飛鳥川に沿って約500mにわたり荒廃竹林が生い茂り、明日香村中心部の景観を分断していたが、このジャングル竹林を伐採し景観を修復した（写真4、5）。

表1. 作業キャンプと日帰り活動

年度	3日間の延べ参加数 (ボランティア・地元集落・公社からの参加を含む)				日帰り活動の参加者数
	作業箇所	作業内容	ボランティア参加数	3日間の延べ参加数(ボランティア・地元集落・公社からの参加を含む)	
2002	栢森	古代植生の復元、飛鳥川源流整備、竹細工体験	16	102	
2003	〃	ゴロ滝周辺の整備、遊歩道設置	19	108	
2004	稲淵	250mにわたり飛鳥川河岸の荒廃竹林伐採	35	205	
2005	阪田	くつな石周辺の整備、鳥居奉納、木橋修復	39(海外5)	210	31
2006	上居	荒廃竹林5000平米伐採	47(8)	210	58
2007	〃	荒廃竹林5000平米伐採	37(5)	210	70
2008	飛鳥	飛鳥川1キロの区間整理	40(5)	194	84
2009	川原	飛鳥川沿いの500mにわたるジャングル竹林伐採	34(2)	156	108
2010	〃	飛鳥川沿いのヤングル竹林伐採、河岸整備	35(5)	153	113
2011	飛鳥	飛鳥寺境内地の荒廃竹林伐採、景観修復	37(4)	210	155
	合計		339人	延べ1758人	619人

さらに、飛鳥川源流や「ゴロ滝」の整備、遊歩道の設置、稲淵や飛鳥集落の2.5キロに及ぶ飛鳥川の清掃・整備、阪田地区の水神「くつな石」一帯の整備、飛鳥寺境内地の荒廃竹林と瓦窯遺跡の整備、倒壊寸前の廃屋の解体・撤去などを行ない、この10年間に6集落、計21か所の景観を修復した。参加者は延べ2,400人にのぼる。

(2) 作業箇所・日程の決定と3者の役割分担

作業キャンプは、景観ボランティア明日香と地域振興公社が協議して作業候補集落と日程を絞り、公社から作業候補集落に、ボランティア作業の受け入れと日程について交渉してもらい、了解が得られれば実施決定となる。



写真1 石舞台古墳北側、上居地区の荒廃竹林伐採作業。1 haに及ぶ竹やぶで、2回の作業キャンプでやっと終了（2006年7月）



写真2 伐採した竹やぶあとに、バケツリレーで土上げし、山桜120本を植樹（2008年2月、上居地区の傾斜地で）



写真3 荒廃竹林を伐採し、山桜を植えて整備した上居の傾斜地。数年もすれば桜の名所に(2011年10月)

集落が、作業キャンプ実施を公社や景観ボランティア明日香に要請している場合、キャンプはすんなり決まるが、こちら側から集落に、作業キャンプ受け入れを持ちかけた場合は、集落内の合意形成に手間取り、なかなか決まらない場合もある。

次に、3者の役割分担について説明したい。(図1参照)

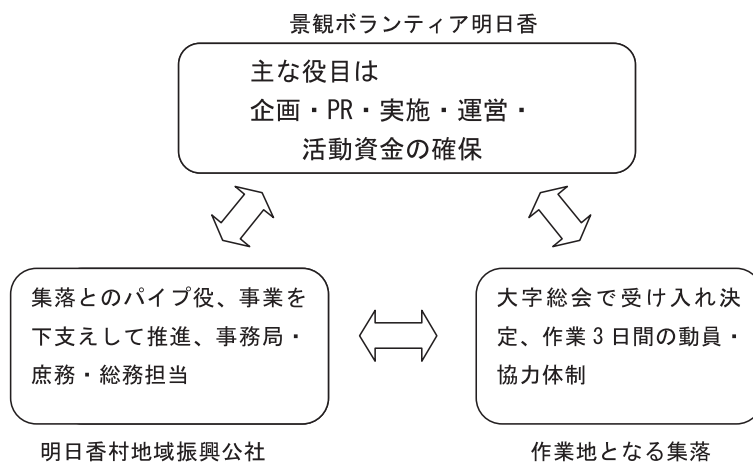


図1. 作業キャンプ実施に向けた3者の役割分担



写真4 飛鳥川に沿って竹やぶが生い茂り、景観が分断され、飛鳥川も飛鳥寺方面が望めなくなった遊歩道（2009年7月、川原地区で）



写真5 ジャングルのように生い茂っていた竹林を伐採、飛鳥川も対岸の苑池遺構も見渡せるようになった遊歩道（2010年7月、川原地区で）

景観ボランティア明日香は、作業キャンプ実施が決まるとその作業地を踏査し、どこを、どのように修復するか、一般参加者に技術指導しながらどう作業を進めるか、伐採した竹、雑木はどう処理するか、作業班の編成、指導体制、作業終了の記念（モニュメント）に何を設置するか、など3日間の作業計画を練り、機材の準備・購入にあたる。

さらに、環境関係のファンド（助成団体、基金）からの助成金の確保、参加者募集・日程・参加者留意事項などの文書作成、マスコミやホームページ、ブログを通じた募集PR、海外からの参加者受け付け・送迎・世話、作業現場での指導・監督、伐採した竹・雑木の処理、移動用のレンタサイクルの準備、宿舎での世話、地元総代さんらとの交流会、世代間交流コンパ、内外からの活動報告会、発掘調査の研究者を招きホットな話題を聞く飛鳥歴史講話、村内観光ツアー、さらに会計を担当する。まとめて言えば、ボランティアの方は、企画、PR、実施、進行、運営、さらに活動資金の確保役である。

一方、地域振興公社は、作業地となる集落との交渉・協議、募集案内の印刷・発送、参加受付、参加者への連絡事項の発送、ボランティア保険加入金の負担、配付資料の準備、班編成案づくりなど事務局を担当してもらっている。

さらに、参加者を駅から宿舎への搬送、作業機材の提供、昼食素材の提供、給水器、救急箱の準備、スタッフの作業参加、伐採した竹、雑木の処理など、いわば事業を下支えして推進する総務、庶務関係の業務を一手に引き受けてもらっている。

作業地は、公有地、私有地、入会地、寺領などの場合があり、所有者の確認・交渉・仲介役はボランティア団体では不可能で、公社しかできない重要な役割である。さらに、景観についての厳しい規制がある村なので、作業が規制に抵触することがないように目配りしていただくのも公社の役目である。

作業地となる集落（大字）には、大字総会で受け入れを決定し、作業キャンプ3日間の集落からの動員・協力体制を整えてもらう。具体的には、作業参加者・指導者のリストアップ、昼食の炊き出し体制、昼食場所となる集会所の利用、参加者に配布する、集落の歴史資料の準備などである。

この事業は、3者のうち、どれひとつが欠けても進まないし、3者間の意思疎通と信頼関係がないと成り立たない。

3. 課題はどう解決したか

この活動を提言した段階で、成功するかどうか不安材料がなかった訳ではない。参加者に汗を流してもらうのに費用負担が大きすぎないか、素人の参加者に技術指導できる体制は果たして整えられるのか、作業したあとのメンテメンスはどうするか、などの問題である。活動が始まってから、浮上した課題もあり、こうした課題にどう対処したかを検証したい。

（１）費用を払ってまで汗を流してもらえるか

活動が始まる数年前、筆者のひとり三木が、阪田集落や明日香村商工会から頼まれ、景観保全作業キャンプ構想について講演したところ、会場からは、アイデアはおもしろいが、東京から6, 7万円もかけて明日香に汗をかきに来る奇特な人は果たしているだろうか、と予想したとおりの冷めた反応ばかりだった。

しかし、いざ開始してみると、毎年、東京、神奈川、埼玉などから参加するリピーターが4, 5人いて、例年、10～13都道府県から参加者がある。

このことは、古代史ファンや万葉集のファンにとって、日本人のこころのふるさとである明日香で起居し、内外から集まった仲間や地元の人と一緒に汗をかき、その景観保全に貢献したという達成感に浸れる体験は、費用負担にまさる魅力となっているからと考えていい。

参加の動機を尋ねると「都会生活からの一時逃避」、「一味違った明日香体験をしたい」「万葉の世界にひたるため」といった答えが目立つ。

筆者のうち三木、新開は、英国の歴史文化自然遺産を保全するボランティア団体・英国ナショナル・トラストが主催し、その保有地で歴史文化自然遺産の保全・修復作業を体験する10日間の作業キャンプ「日英合同ワーキングホリデー」(Venture with Japan)に参加したことがある。

その体験から、日本でも、飛鳥古京の地で、作業箇所と作業内容、プログラムを工夫すれば、交通費、宿泊費を払っても、遠隔地から、とくに都市住民の参加があるはず、と踏んでいたが、ほぼ予測通りの結果になった。

当然のことだが、主催者として、作業箇所は歴史的由緒あるところを優先して選び、作業キャンプの魅力を高める一方、プログラムを絶えず見直し、宿舍と作業地の往復にレンタサイクルを採用したり、村内観光ツアーもコースを複数用意したりして、マンネリ化しないよう心がけている。

また、参加者の負担を軽減するため、年会費制は取らず、作業キャンプ・日帰り活動に参加したときのみ、作業機材購入費として500円ずつ納付してもらっている。

活動に参加した人は会員名簿に登録し、活動募集案内や公社発行の「あすか夢だより」などを送り、それから3年間のうちに一度でも参加すれば会員資格はさらに3年間延長、もし3年間に一度も参加がなければ、会員名簿から削除し、参加意欲のある人を増やすようにしている。

（２）作業の指導体制はどうする

一口に景観保全作業といっても、これまでに手がけた作業は、荒廃した竹林や里山林の伐採・撤去・チップ化作業、飛鳥川河岸の雑木、竹林、雑草の伐採、刈り取り作業、飛鳥川沿いやゴロ滝への遊歩道の整備・設置、ササユリ自生地の保全、滝の整備、鳥居の制作・設置作業（写真6）、木橋の修復作業（写真7）、竹林伐採箇所へのヤマザクラ120本の植樹、ミニパーク一面にサザンカ植樹、廃屋の解体処理・撤去作業、道標や案内板の設置（写真8）など驚くほど広範囲にわたっている。



写真6 朽ちて倒壊寸前だった、水神「くつな石」の鳥居を新調し、奉納した
(2005年7月、阪田地区で)



写真7 作業現場へ向かう橋の修理。景観保全には思わぬ作業が待っている
(2005年7月、阪田地区で)



写真8 水神「くつな石」への道標の設置。道標づくりも重要な活動
(2005年7月、阪田地区で)

求められる技術も、建設、土木、景観設計、木工、森林管理、河川管理、農業、園芸学、造園など多岐にわたる。それに対応できる指導スタッフは果たして確保できるのか。専門家に講師料を払って来てもらう方法はあるが、資金の乏しいボランティア団体には無理な話である。

第1回、第2回の作業キャンプは、公社が、奥飛鳥のボランティア団体「飛鳥川の原風景を取り戻す仲間の会」に協力を求め、作業指導をしてもらった。

しかし、景観ボランティア明日香が発足した第3回目（2004年）からは、それまでの参加者の作業ぶりから、技術を持つ人を選抜し、指導にあたる運営委員になってもらい、自前の指導チームを組織した。

徐々に運営委員を増やし、15～17人で指導している。指導チームは、建築士で大工、景観設計と造園の専門家、森林インストラクター、園芸、農業、里山管理、土木工事の専門家、チェーンソーや刈り払い機の講習修了者、森林ボランティア安全講習修了者、看護師、コンピューター研究者らで構成、作業箇所ごとに異なる作業内容に対応し、一般参加者の技術指導にも力をいれている。

景観修復にかかわる幅広い作業をほとんどこなせる、技術レベルの高い技術集団に発展し、ほかの団体からうらやましがられている。参加者の中に、技術をもつ人が少なからずいて、主催者側は作業ぶりから、これらの技能者をマークし、運営委員になるようお願いする方法で、

これほど優れた技術集団を自前で組織できるとは、発足当初は想像すらできないことだった。

英国のワーキングホリデーでは、1チーム12人に1人の専門家がついて指導し、参加者が使えるのはのこぎり、鎌などに限定、チェンソー、刈り払い機などは使えない。これに比べ、明日香は指導チームの層が厚く多彩なうえ、使う機具もルートカッター、ウインチ、竹・雑木を粉碎するチョッパーシュレッダーなど高度である。参加者でも慣れた人には、チェンソー、刈り払い機なども使ってもらっている。

（3）作業後のメンテナンスは誰が担当

活動開始当初、作業個所をめぐって次のような議論があった。

作業の対象個所を限定して、そこだけを保全していく方法もあるが、内外からボランティアを集めるには、作業個所と作業内容が毎年、変わっていく方がいいのではないか。

景観修復が必要な場所は全村に広がっているのだから、全村を対象とすべきではないか。

多くの集落を訪ねて交流した方が、景観保全のPRになるのではないか。さらに、公社の目的からして一部集落の景観保全にだけ肩入れするのは問題で、やはり全村を対象にすべきだ。

こうした議論を重ねて、作業個所は固定せず、原則として、毎年、異なる集落へ出かけて作業することになった。しかし、この方法では、作業後のメンテナンスが必要になる個所が雪だるま式に増え、景観ボランティア明日香だけでは、手に負えなくなる。これをどうするかが、最大の課題となった。

阪田集落（大字）の水神「くつな石」で実施した4回目の作業キャンプから、集落ぐるみで協力してもらう「ボランティア・村側・集落」の3者による「協働作業方式」が徹底し、私たちボランティアと地元集落とのコミュニケーションがよくなり、つまり、ボランティアの“顔”がよく見えるようになって、作業結果も大いに評価していただくようになった。

その結果、「全国から、台湾から、来てくださったボランティアの皆さんが、手弁当で、これほどきれいにしてくださったのだから、放置する訳にはいかぬ」（山原茂喜・阪田大字総代、当時）ということになって、阪田大字老人会が、年3回、「くつな石」周辺の草刈り、清掃のメンテナンス作業を引き受けてくれることになった。

阪田大字がきつてとなったようで、作業キャンプで整備が終わった個所のメンテナンスは、その集落の自治会、もしくは役員会、地元有志、老人会などが、自発的、自主的に引き受けてくださることが次第に定着し、メンテナンス問題は解消できた。

したがって、メンテナンスを目的にした年2回以上の日帰り活動は、老人世帯ばかりで人手がない小集落や、作業が難しい場所に限って実施している。

（4）開催日程と熱中症対策

英国ナショナル・トラストの作業キャンプ（ワーキングホリデー）は原則1週間だ

か、忙しい日本社会で英国と同じ期間開催するのは、極めて難しい。（社）日本ナショナル・トラスト協会が、2000年から2002年にかけて富士山、赤目の滝、阿蘇山で1週間ずつ英国式のワーキングホリデーを実施したが、日本で1週間続けて休める人は少なく、参加者募集も、リーダーの確保もなかなかうまくいかず、その後は行なわれていない。

この教訓を踏まえ、われわれの作業キャンプは3連休を利用する2泊3日間にしている。しかし、その日程を「ボランティア・村側・集落」の3者の都合に合わせるのは難しい。

ボランティアにとっては、気候のいい春か秋がいい。ところが春、秋の行楽シーズンは明日香地域振興公社主催の観光イベントが目白押しで、公社の協力が得られない。集落にとっては、田植え、稲刈りの農繁期は、作業キャンプの受け入れなどできない。

そこで、7月の「海の日」を含む3連休か、もしくは稲刈り後の11月に実施せざるを得ない。これまで7月の3連休に、木陰のある個所で実施することが多かったが、2008年は、飛鳥川の川面を覆いつくした夏草を刈り取る作業キャンプを実施した。

真夏のカンカン照りの、しかも木陰のまったくない場所での作業キャンプは初めてで、水分と電解質の補給を万全にし、休憩を頻回とるようにしたが、3日目の正午前になると、熱射病の症状を訴える参加者や地元の人が7、8人に達した。救護班の看護師2人が直ちに応急手当をし、宿舎や自宅に帰らせて手当を続け、救急車で搬送される事態は避けられた。

この反省から、真夏に作業キャンプ実施する際は、2、3日目の日程を大幅に手直した。

それまで2日目は午前7時起床、午前・午後に7時間作業、3日も午前7時起床、午前中に3時間だけ作業（午後は村内ツアー、閉会式）し、計10時間の作業だった。

これを変更し、2、3日目とも午前5時起床、午前中に5時間ずつ計10時間作業する日程にし、2日目の午後は、昼寝、散策、入浴もOKの自由時間にした。つまり、朝の涼しいうちにその日の作業をすませ、熱中症を予防しようという対策である。

この日程は2010年7月の作業キャンプから採用した。集落側の参加者もこの日程では、朝5時には起きて作業に加わらねばならず、集落の役員会で猛反対の声が出て紛糾したが、総代さんの粘り強い説得でなんとか解決した。

作業時間は減らさずに、熱中症を防止しようという苦肉の策だが、この2年間、熱中症の発生はゼロ、参加者には2日目の午後の自由時間がとても好評である。

4. 活動評価の視点

ボランティア活動の成果はどう評価すべきだろうか。

毎回、作業キャンプ参加者にアンケートし、参加動機、作業内容、作業量、班編成、班長のリーダーシップ、作業指導、飛鳥歴史講話、宿舎、食事、地元との交流などについて、尋ねているが、おおむね好評で、プログラムや運営・進行に手直しを迫られたことはない。

自由記述の欄では「竹林伐採だけでなく、幅広い年齢層、職業、考え方の方々と接することで多くのことを学び、とても楽しい時間が過ごせた。台湾の方々とも交流が持て、忘れられない思い出の残る3日間になりました。初めてのワーキングホリデーでしたが、想像以上にしんどく、でも楽しく（作業だけでなく、参加者のみなさんとの交流）できたので、また参加したい」、「きちんと統制がとれた作業と、おいしい食事と、気軽な楽しい飲み会」（2011年度アンケートから）など、こちらも評価する声がほとんどを占めている。

受賞歴・表彰歴も、活動がどう評価されているかをみるものさしになろう。

（社）日本観光協会から2008年、「長年にわたり地域の清掃美化に奉仕した」として、同年、明日香村からは「明日香村のかけがえのない歴史的景観の保全に寄与した功績は誠に顕著」として表彰された。同年、「地域学サミットin 熊野新宮」（新宮市主催）で、全国公募で選ばれた6団体の一つとして活動報告した。

さらに2009年には、日本都市計画学会関西支部主催の「関西まちづくり賞」を受賞した。

授賞理由は①大人数ボランティア団体による農村景観保全の効果的な方式として成功している②地域内で活動対象地を順に移動させることによる広域の景観保全への波及の可能性の点で評価でき、長年活動が連続するよう工夫されている、などの点だった。

まちづくりを重要課題としている専門の学会から、まちづくりの関係で最も権威があると思われる賞をいただき、われわれが模索してきた活動の方向、方法は間違っていなかったことを実感した。

台湾の大愛テレビが、10年間の活動を紹介する50分間のドキュメンタリー番組を制作、2011年2月、衛星放送とインターネットで世界中に放映した。2011年10月には、韓国の古都・益山市の市長ら40人が、古都の景観保全の「海外先進成功事例」として、われわれの活動を視察した。

参加者の反応や、受賞歴も活動の評価に欠かせないが、私たちは、活動が成功したかどうか、成果があがっているかどうかは、作業キャンプをした集落に、自主的・自発的にメンテナンスする組織ができ、それが始動しだしたかどうかで判断している。

幸い、2003年以降、作業した集落には、すでに述べたように、大字自治会、もしくは役員会、地元有志、老人会などのメンテナンス組織が生まれ、私たちが毎年、作業キャンプをするたびに、村内に景観保全のネットワークが広がり、景観保全意識が高まる結果になっている。

5. 新たな課題

作業のしやすい場所から、順次、景観修復に取り組んできたので、10年も続けると、年々、作業が難しくなり、より高度な技術が要求される個所が多くなってきた。

これに備え、運営委員で構成する技術指導チームの事前準備により時間をかける一方、作業の難易度に応じ、3日間で達成する作業規模を縮小することも検討したい。

290人の会員のうち、明日香村在住の参加者はたった一人である。その男性も明日香生まれではなく、明日香が大好きで住みついた、“よそ者”のサラリーマンである。

こう記すと、明日香村民の環境保全意識はおそらく低い、もしくは、景観ボランティア明日香の活動は、地元ではまったく無視されている、と思われるかもしれないが、いずれも間違いである。

作業キャンプは、参加のボランティア全員が、2泊3日間、宿舎に泊まり込むのを前提としたプログラムにしている。これは、作業後のミーティング、交流会、懇親会などを通じ、参加者同士のコミュニケーションを図り、各班のチームワークを高めるためである。

作業キャンプ地となった集落からの参加者は、どんな体制で、どんな作業をするかが事前にわかっているから、日中だけの地元参加で支障はない。しかし、他の集落の住民が、ボランティアとして参加する場合、村内で作業するのに、なぜ、2日間も宿舎に泊らねばならないのか、自宅から通えばいいのではないかと、泊るのが前提なら参加しないということになる。

同じ事情で、明日香村周辺の市町村からのボランティア参加も極めて少ない。村内、近隣からの参加者が少ないことは、運営委員で明日香村の近隣に住んでいる人も少ない結果になる。17人の運営委員のうち、車で30分以内は、半数にすぎず、残りの半数は県内の遠隔地か他府県で、活動の中核となる運営員会を頻繁に開けないのが悩みである。

「飛鳥・藤原京の宮都とその関連施設群」を世界遺産に登録するため、奈良県、明日香村などが中心になり、登録推進活動が展開されている。登録審査では、地元住民がどれほど熱意をもって景観を保全しているかが、重要な物差しの一つになるとのことで、われわれの活動がにわか注目されるようになった。私たちは、登録推進活動の応援団として、さらに活動を強化したい。

これまでに台湾、韓国環境団体が参加してくれ、台湾の団体とは姉妹提携し、お互いの作業キャンプに参加し、交流を深めている。こうした団体を結び、東アジア景観保全ネットワークを構築することもこれからの課題である。

6. 考察

（1）ボランティア活動の発祥地、英国でナショナル・トラストのワーキングホリデーに参加して、ボランティア活動は①まず自分が楽しむこと②楽しみながら、心地よい汗をかくこと③心地よい汗をかきながら、ちょっぴり社会に貢献したという満足感に浸ることと納得した⁴⁾。

このモットーに従い、前報告で、明日香村でボランティアによる泊まり込みの景観保全作業キャンプを提言し、実現の道筋を示した。この“シナリオ”に従って、「景観ボランティア明日香」が発足、景観保全作業した集落に、自発的、自主的に作業個所をメンテナンスする組織ができ、景観保全の仕組みが村内に広がりだしたのは、10年にわたる活動の成果である。

ボランティア・村側・地元集落の3者が、バランス良くスクラムを組んで、力まず、あせらず、楽しみながらやってきたことが、息の長い活動につながったといえるだろう。

(2) 上居大字総代の山本欽司さんは、われわれの「暮らしと生活聞き取り調査³⁾」のとき、こう語っている。

「ボランティアに来てくれると言っても、どんな人かわかりません。一回きりのお遊びで、それっきりかもわからへん、初めは正直言ってもものすごく不安でした。でも、こうして何回も顔を見せてくれはって、ああこの人たちは本気で来てくれてはるんやなと思いました。すごく嬉しいです。

実は、村の人たちも、ボランティアの人たちが何回も来て作業してくれたことで、“私たちの村はええとこなんや”と思うようになって、みんなが少～しずつ、まとまってきたような気がします。ボランティアの人たちの手はどうしても必要です。ボランティアの人の手を借りて、そんで村の人も一緒にやって、ちょっとずつ上居をきれいにしていきたいです。ほんま、これからもよろしゅう、お願いします」

村の人たちのボランティアに対する心情、つまり不安から期待への変化、さらに、ボランティア活動に触れたことが、自分たちの村を見直し、みんながまとまるきっかけになったという本音は、感動的である。聞き取り調査を通じ、私たちと上居大字との絆はより強いものになった。これがボランティア活動の醍醐味だろう。

(3) ボランティア活動の経済効果は微々たるものと思われがちだが、そうだろうか。

例えば、ボランティア40人と地元の人30人の計70人が、3日間景観保全作業し、仮に1人1日当1万円とすると、明日香村は210万円の寄付を受け、その金で景観修復作業をしたのと同じ効果がある。

ボランティアは、2泊3日間、宿泊するので、宿泊費、食費、飲料代、土産ものの代などを含めると、最低1人2万円、40人で80万円となる。さらに景観ボランティア明日香がファンドからの助成金で、1回の作業キャンプに投入する資金は、購入する作業機材に左右されるが30～60万円。これに地域振興公社からの助成金も加わるので、地元への経済効果は3日間で400万円前後になろう。

私たちはこの10年間に、10回の作業キャンプと、10数回の日帰り活動をしたので、これらの活動の経済効果は5000万円以上にのぼるはずである。

(4) 明日香村では、発掘調査を手伝う「飛鳥遺跡発掘作業キャンプ」、「飛鳥遺跡景観整備作業キャンプ」、「万葉集探索キャンプ」、トンボ玉や彫金などに取り組む「古代工芸体験キャンプ」なども、企画すれば人気が集まるかもしれない。

作業キャンプは明日香村だから可能であって、ほかのところは無理、だから普遍性はないと思われるかもしれないが、そうではない。

熊野古道の景観保全には「景観ボランティア熊野」を発足させれば効果的だろうし、他の市

町村でも、その地区の歴史文化自然遺産に応じ、企画できるだろう。

例えば「古民家修復作業キャンプ」、「ホテルの里復活作業キャンプ」、「神社・お寺の自然環境保護キャンプ」、「古典芸能（神楽・舞・盆踊りなど）伝承キャンプ」、「旧街道景観保全キャンプ」など、2泊程度泊り込みで実施すれば、指導する側と参加者、さらに参加者同士の絆も強まって、まちおこしとして盛り上がるはずである。

（追記）景観ボランティア明日香は10年間の活動が評価され、農水省の後援で行われている、全国農村景観保全活動コンクール「第7回（平成23年度）美の里づくりコンクール」（財団法人・農村開発企画委員会主催）で、2012年3月、農水大臣賞に次ぐ農水省農村振興局長賞を受賞した。

謝辞

景観ボランティア明日香の顧問として助言をいただいた愛知和男・元環境庁長官と関義清・前明日香村村長、（財）明日香村地域振興公社で、ボランティアと二人三脚の景観保全活動の推進にご尽力いただいた渡辺敏之・元理事長、木村衛・元常務理事、福田和由・元事務局長、福角登・常務理事、杉本嘉久・事務局長、吉田裕晶・担当職員、景観ボランティア明日香のゆるぎない礎を築いてくださった小野山義之助、奥田一彦、垣見究吾、野々芳孝、平野和雄の各運営委員をはじめ役員の皆さま、全国から繰り返し参加していただいた会員の皆様に、ここから感謝します。

参考文献

- 1) 三木健二「歴史的風土の保護と創造的利活用——奈良県明日香村を例として——」大阪経済法科大学科学技術研究所紀要第4号（2000）71-83頁
- 2) 特別部会は平成10年6月設置、翌11年3月、最終報告をまとめ、第46回歴史的風土審議会が答申。筆者の一人三木は特別部会委員を務めた。
- 3) 上居（じょうご）集落で行った調査の結果は、景観ボランティア明日香のホームページ（<http://www.ascva.com>）からダウンロードできる。調査の概要は、佐々木孝子「上居の暮らしと伝承聞き取り調査から」季刊明日香風第113号（2010）29-34頁に掲載。
- 4) 三木健二「明日香との出会い——歴史的景観をいつくしむ文化を育てたい」明日香村文化協会々誌『明日香』30周年記念号（2008）39-47ページ